

第3節 勝山館跡周辺

勝山館跡の周辺にも、縄文から擦文、中・近世にいたる遺跡が数多く存在するが、館跡ともっとも関連が深い上ノ国市街地遺跡から順に略述することとする。

1 上ノ国市街地遺跡（埋蔵文化財包蔵地）【第27図参照】

勝山館跡の整備を目的とした調査が進展するにつれ、館跡の直下に館の経済を支えた町屋の中心部が存在するはずとの指摘を歴史学の専門家から受けるようになっていた。

1) 第1次調査地点

平成7年9月、館直下の上ノ国市街地の発掘調査が竹内屋敷遺跡（上ノ国遺跡）の調査から約35年ぶりに再開された。八幡野丘陵から延びる尾根が上ノ国市街地の後方に迫り出す、その山際の東端にあたる地点で個人住宅建替えに伴う調査であった。

土層の堆積は薄く、大部分が近世の整地による削平等の攪乱を受けていたが、擦文期の土壙墓を検出し、伸展葬の人骨一体をほぼ完全な形で確認した。遺物は肥前系の陶磁器を中心に、青磁、染付、越前すり鉢、擦文末期の土器や縄文土器などを検出した。

2) 第2次調査地点

平成8年、海沿いの住家の建て替えに伴う発掘調査で、15世紀代の整地盛土層とKo-d火山灰層の間から、瀬戸・美濃、越前、青磁、白磁、染付といった中世後半の陶磁器と、唐津・伊万里などの近世陶磁器を間断なく検出した。

15世紀代の整地盛土層の上面では珠洲すり鉢、瀬戸の天目茶碗などが出土し、現地地表下200cmほどのところで確認されたB-Tm火山灰層上位の擦文包含層からは擦文土器と須恵器を検出し、内耳土器がほぼ完形に近く復元されている。また、現地地表下230cm余の位置からは縄文時代後・晩期の土器を検出した。

3) 第3次調査地点

第1次調査地点のすぐ西隣で、木棺に納められたと推される、伸展葬で南と東頭位の人骨が残る2基の墓壙を検出した。1号墓は漆の皮膜が残存していたことから漆器の副葬を想定、2号墓は鎌、鉞、刀子、漆器、耳飾りが副葬されていることから、17世紀初頭より古いアイヌ墓と推測されている。

4) 詳細分布調査

平成7、8年の住宅建替えに伴う考古学的な発見は、地域住民の間に地下に眠る歴史に対する興味関心を喚起し、市街地一帯の分布調査の契機となった。

平成9年に始まった調査は、住宅軒下や裏庭など猫の額ほどの空気を借りて、1m四方、深さおよそ1.5mのテストピット142箇所を掘開し、それら成果をもとに平成13年には字上ノ国地区の大半を「上ノ国市街地遺跡」として埋蔵文化財包蔵地に登載することとなった。

年代確定の鍵層となるKo-d火山灰層（層厚10～15cm）は市街地中央部から東南にかけての低湿地で純層で確認され、渡島大島火山灰層（Os-a、1741年降灰）の斑状堆積が確認できる地点もあった。それらの上下にローム・基盤礫等で堅緻に整地された「近世整地盛土層」があり、伊万里碗・皿、唐津皿・すり鉢など近世の陶磁器が多量に出土している。

「中世整地層」と考えられるロームや基盤礫等で堅緻に整地した層からは、美濃碗・皿、中国青磁・白磁・染付が出土する。その下に擦文時代の生活面があり、遺構はB-Tm火山灰層を切っていた。

5) 第4次調査地点

調査区は、陸側から海側へ向かって緩やかに傾斜するすり鉢状の沢地で、多数の杭跡がみられた。簡易な建物の建て替えが数回行われていたと推され、船着き場の可能性が示唆された。

この地点では「近世整地盛土層」は確認できたものの、第2次調査地点で見られた「中世整地層」は

確認できなかった。遺物は陶磁器を中心に木製品、獣骨製中柄6点、鉄製品などのほか擦文土器片が出土している。舶載陶磁器は15世紀代から近世初頭のものまでが見えるが、点数は少ない。国産は伊万里、唐津を中心に瀬戸美濃、越前、珠洲、瓦器などが出土している。また縄文晩期の上ノ国式土器を検出している。

6) 第5次調査地点

この地点の土層堆積は薄く、Ko-d 降灰後に削平されたと推測される。出土遺物は「近世整地盛土層」の上から検出したが、肥前系の磁器を中心に約600点と少ない。また、近世の整地層からは骨鏃あるいは中柄と考えられる骨角器が1点出土している。近世前期以降は居住地として利用されることはほとんどなかったといえる。西半部では廃棄物を投げ込んだ痕跡とみられる、近世初頭前後から前半の土層群を検出している。

7) 宮の沢川地点（史跡指定地内）

旧笹浪家住宅（主屋）の保存修理に伴う宮の沢川兩岸の発掘調査で、右岸では、Ko-d 火山灰層直下の慶長期頃（勝山館廃絶直後）の遺物包含層（黒色土層）から多量に廃棄された出土遺物を検出した。葦が大量に混じっており、当時この地がアシヤイタドリが生い茂った葦原であったことが窺われる。

出土遺物は、日常雑器から茶道具までさまざまな器種の陶磁器、金属製品、矛形の形代や木簡などの木製品のほかに、イクパスイや桜皮巻の丸木弓（ポンクー）、高台裏に刻印（シロシ）のある漆器、中柄などのアイヌ関連遺物などである。中世の遺物包含層は確認されていない。

左岸の旧笹浪家住宅附属米・文庫蔵の地点では、15世紀代の整地層に相当する黒色土から15世紀代の青磁・白磁の皿が出土し、館築造直前期の土地利用が想定されている。

8) 第6次調査地点

この地点では、西端の16世紀末～17世紀初頭の土層で、縦横に走る水路状の溝や杭列を確認している。その下の15世紀代と考えられる湿潤な土層では、調査区外の北西方向に延びる布掘状の溝2本も確認した。

16世紀末～17世紀初頭の自然堆積層からは骨角器10点を検出している。また、出土した縄文晩期の土器は上ノ国遺跡に連なるものと考えられる。

9) 第7次調査地点

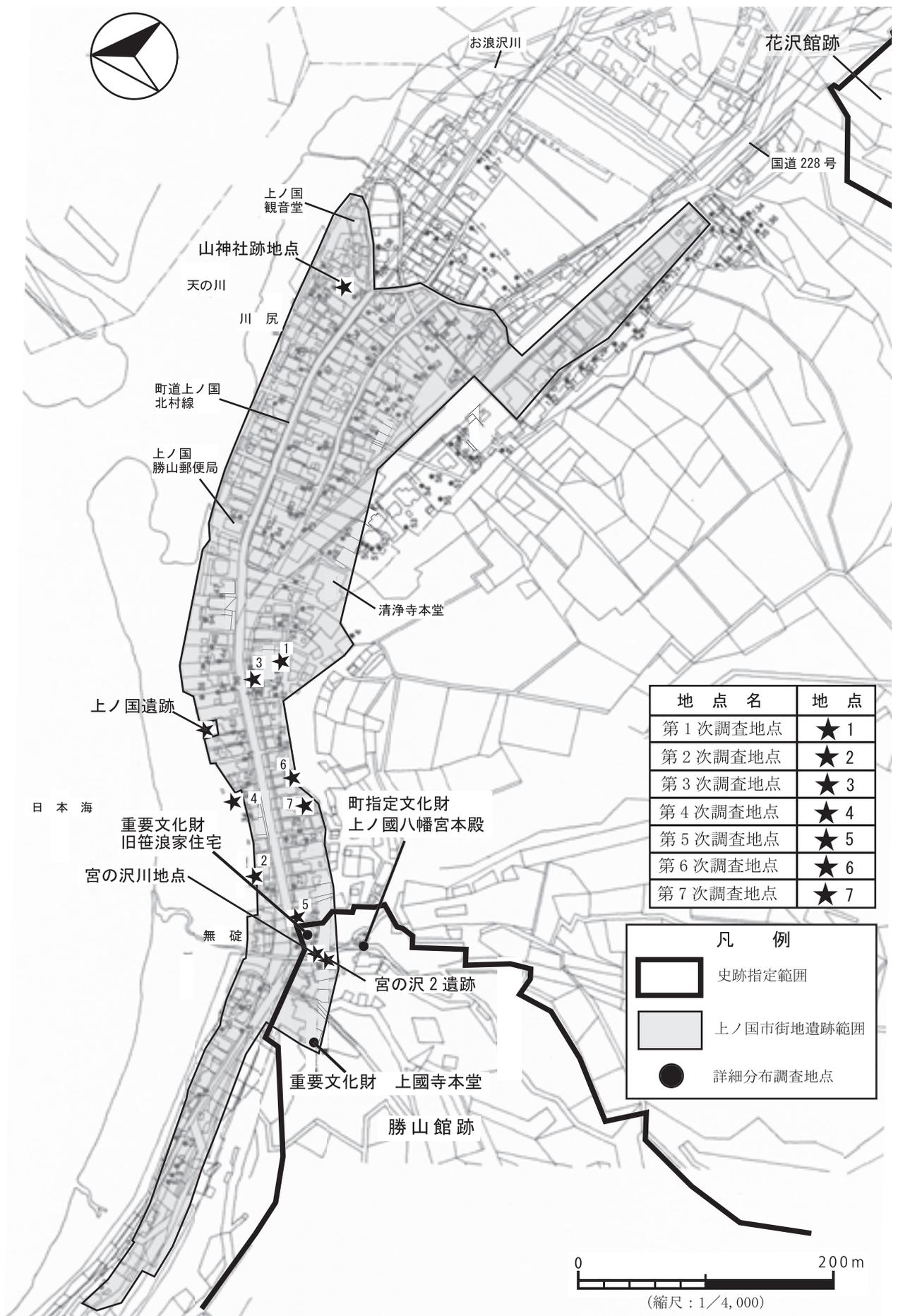
この地点ではKo-d 層の下で東から西方向へ直線的に延びる溝状遺構を検出した。これまでに溝渠（水路・堀）状遺構は、西端の旧笹浪家住宅の裏庭、第5次調査地点、本調査地点、そして東端の第6次調査地点で確認しているが、平成12年の旧笹浪家住宅裏庭の調査で、溝渠状遺構が宮の沢川に取り付くことが確認され、宮の沢川の沢水を引き込んでいたと想定された。これら溝渠状遺構は低湿地の排水改善のための溝、もしくは生活排水などを流す水路としての利用、囲郭施設としての空壕なども考えられるが、詳細は不明である。

なお、この地点では、B-Tm 火山灰上層から擦文土器が98点、下層からは続縄文の恵山式土器、後北式土器、縄文後・晩期の土器も確認できている。とくに続縄文土器の多量出土は後述の「宮の沢2遺跡」を凌ぐものである。

10) 上ノ国遺跡（埋蔵文化財包蔵地）

昭和34年、上ノ国市街地のほぼ中央、海に臨む海拔約3 mの地点で調査が行われ、50点ほどの擦文土器と、縄文晩期の亀ヶ岡式土器系統の大洞B、BC式といわれる土器を検出した。調査担当者の大場利夫氏は亀ヶ岡土器分布圏内の他の地方の土器に比べて著しい特色が見られるとして、「上ノ国式土器」と名づけた。旧称は「竹内屋敷遺跡」という。

なお、この遺跡は「上ノ国市街地遺跡」の範囲に含まれるが、学史的な経緯を尊重し、竹内屋敷地点に限定し「上ノ国遺跡」として別途登載している。また、上ノ国遺跡はいまも縄文晩期「上ノ国式土器」の標識遺跡として知られている。



第27図 上ノ国市街地遺跡に係る詳細分布調査地点